



京大広報

号外

2006. 4

目次

卒業式・学位授与式			
卒業式における総長のことば	2122	平成17年度修士学位授与式.....	2128
修士学位授与式における総長のことば	2124	博士学位授与式	2129
博士学位授与式における総長のことば	2126	医療技術短期大学の動き	
大学の動き		平成17年度医療技術短期大学部	
平成17年度卒業式.....	2128	卒業式・修了式	2130



平成17年度 卒業式



京都大学広報委員会

<http://www.kyoto-u.ac.jp/>

卒業式・学位授与式

卒業式における総長のことば

平成18年3月24日

総長 尾池 和 夫

本日、卒業される2,732名の皆さん、ご卒業まことにおめでとうございます。ご来賓の沢田元総長、長尾前総長、名誉教授、ご列席の副学長、各学部長、部局長、教職員とともに、またご家族とともに、皆さんのご卒業を、心からお祝い申し上げます。

京都大学を卒業した方は、174,013名になりました。多くの方たちがすでに世界の各地で活躍しています。皆さんもこれからさらに進学して学問の道を究め、あるいは社会に出て思い切り活躍することになります。どうか健康を保って元気に活躍して下さいよう祈っております。

今日の卒業式に至るまで、皆さんは、学習に、研究に励んでこられました。その上に、課外活動やボランティア活動に、各地への旅行に、学友や先輩との熱い議論に、それぞれ楽しい学園生活を謳歌してこられたことと思います。あるいはさまざまな悩みもあったかと思えます。いくら考えても講義の内容を理解できなかったこともあったかもしれません。いくら探しても求める情報が得られなかったり、疑問や悩みに答えが見つからなかったということがあったかもしれません。しまったと思う場面があったかもしれません。いずれにしても皆さんはそれらを見ごとに乗り切って、今日の卒業式を迎えられたのであります。

皆さんは、京都大学の自由の学風の意味を正しく理解し、自学自習の伝統を受け継いで学位を得られたのであり、これは一生涯を通じて、誇りとしていただけることと確信します。常に自分の目で真実を見つめ、自分の考えを持ち、これからも、人のために考え、人のために働き、社会のために仕事をする人であり続けてほしいと思います。そして自らのさらなる目標をさだめて、それを実現させる不断の努力を続けてほしいと思います。

この体育館の天井にはアスベストが使われておりました。空気中濃度の測定値はそれほど大きな値を示してはいませんが、阪神・淡路大震災から11年、大震災のときには建築材料が飛び散った経験もあり、吉田山の西の麓に沿って花折断層があり、長い間動いていないことがわかっている以上、もしアスベストが飛び散ることになると広い範囲に影響



を与えますので、早期に改修することに決めました。皆さんのご協力のもとに、昨年9月26日から施設の使用を停止してアスベストの除去工事を実施し、このたび、工事を完了し、しかるべき期間において基準に従って空気環境の測定を行いました。工事前のアスベスト濃度が1リットルあたり0.2～2.8本であったのが、工事後はすべて0.2以下になりました。これは一般大気のレベルであり、体育館の使用が再開できることになったものであります。皆さんが今吸っている空気は、百万遍の外気よりもきれいな空気と言えるかもしれません。

大学の教育と研究の活動にともなう廃棄物の処理は、教育研究の一部をなして、排出者自身が処理にあたるという基本原則が京都大学にはあります。このような考えを基にする取り組みは、1989年の職員組合の熱心な運動や、学生たちの立て看板などでの訴えをきっかけに始められた歴史があります。基本理念の中で「京都大学は、環境に配慮し、人権を尊重した運営を行うとともに、社会的な説明責任に応える」と明記しており、京都大学環境憲章を定め、全学支援業務を推進する環境安全保健機構を設置しています。

21世紀の世界では持続可能性を追求することが重要とされています。そこにはさまざまな複雑な問題があります。それらに一つひとつ取り組むのも、また総合的に取り組むのも、皆さんの課題となりうるのですが、例えばそこには、だれも知らない問題があり、なかなか気づかない問題があり、疑いを持っていても証明ができていない問題があり、誰かが気づいていても隠れている問題、一部の専門家の訴えが広く伝わっていない問題があり、ときには意図的に隠された問題、意図的に改竄あるいは捏造された問題などがあるかもしれません。

企業においては、利益の追求と社会貢献が使命と考えられますが、ステークホルダーとの関係を考えながら経営することが必要で、利益だけを追求した経営者の方針が不祥事の発生につながる例も見られます。

科学者の倫理、情報倫理、人としての倫理、技術者の倫理、経済活動の倫理が問われる出来事があります。京都大学の卒業生の皆さんには、卒業生としての誇り高い、高度の倫理観を持ち続けてほしいと思います。大学にとって教育と研究と社会貢献が基本的な役割ですが、教育や社会貢献のもとを支えるのは、先端をゆく研究の成果であり、それらの蓄積と学問の伝統を守る学者の集まりです。その大学で万一最悪のことが起こるとすれば、それは研究成果をいつわり、成果を世に発表する手段である論文を捏造する行為が意図的に行われることであると思います。近年そのような事件が、実際に身近に起こったのを見ることになり、とり返しのつかない事であると実感することになりました。

皆さんの在学中にも、いろいろの事件がありました。うそとまこと、外観と中身、さまざまの虚と実が溢れているという現実を見てきました。このような問題を、進学しても、社会に出て仕事をしていても、卒業生の皆さんは常に考え続けていただきたいと思います。なかなか気がつかない虚があったり、すぐ身近に大切な実があったり、自らの目でしっかり見て初めて見えてくるものがあります。

京都大学そのものも、数百年の歴史を持つヨーロッパの大学などに比べると、高々100年余りの歴史の中で、まだまだ未熟な面を持っていると思います。これからも改善を重ねながら世界に通用する大学としての輝きを保つために、不断の努力を惜しまない所存です。皆さんもこの京都大学を誇りを持って母校と呼びつつ、この大学の成長を見守ってくださるようお願いいたします。

21世紀は多様性の時代と言われることがあります。京都大学にも世界の各地からの学生がいます。これからはますます多くの留学生に来てほしいと思っています。卒業生の皆さんも21世紀の国際社会の中で、活躍することになります。最近の4年間を見ただけでも、例えば、多様性の中の統一をうたう欧州連合では2002年にユーロ紙幣と硬貨を導入しました。2003年には、日本にも「遺伝子組換え生物等の使用等の規制による生物の多様性の確保に関する法律」という法律が6月18日に公布されました。

この日は京都大学の創立記念日でもあって、妙に記憶に残っています。生態学的には、種の多様性、生物の多様性、遺伝的多様性などの問題があります。来週、3月27日(月)と28日(火)には、京都大学21世紀COEプログラムの一つである「生物多様性研究の統合のための拠点形成」のグループが主催して、公開シンポジウム「形態と遺伝子から探る生物多様性 - 収斂・擬態・種分化・新規形質 - 」が開催されます。

皆さんがこれから活躍する国際社会では、さまざまな民族や宗教、さまざまな思想が存在します。特定の国がその方針を善として、反する国を悪と決めつけたり、個人が自分の思想を善として、反する思想を持つ人を悪とすることは、許されないことあります。

京都大学は自由の学風を伝統として尊び、自学自習の伝統を大切にしてきました。例えばそれが探検大学の呼び名につながり、アフリカにおける霊長類の研究に発展し、アジア、アフリカ地域の地域研究に発展したというように、幅の広い歴史を持っています。そのような京都大学で学習に励んだ皆さんは、これからあらゆる可能性のある世界に、大きく羽ばたいてくださると思います。

京都大学はとくにフィールドワークを得意とする大学とも言われます。昨年の卒業式でもギニアのことを話しましたが、今年もアフリカのギニア共和国から私の部屋に来客がありました。今年もギニアで、第9回の京都大学主催の国際シンポジウムを開催します。京都大学霊長類研究所では、ギニアのボソウ村の野生チンパンジーの研究を行ってきましたが、野生のチンパンジーたちのために「緑の回廊」を作るプロジェクトを進めています。30年以上研究してきた松沢哲郎教授たちは、ボソウ村で人と共存する珍しいチンパンジーの群れを守るために寄付を募っています。卒業の記念にそのような運動に参加することも考えてみていただきたいと思います。

皆さんは、世界の平和を大切に、地球社会を大事にする人であってほしいと思います。人類の福祉に貢献する仕事をしてほしいと思います。健康を保つように心がけて元気に、さらなる学習に、仕事に励んでいただきたいと願いつつ、私のお祝いの言葉といたします。

ご卒業、おめでとうございます。

修士学位・修士（専門職）学位・ 法務博士（専門職）学位授与式に おける総長のことば

平成18年3月24日

総長 尾池 和 夫

本日、京都大学修士の学位を得られた2,139名の皆さん、修士（専門職）の学位を得られた33名の皆さん、法務博士（専門職）の学位を得られた134名の方々、おめでとうございます。ご来賓の沢田元総長、名誉教授、ご列席の副学長、各研究科長、学舎長、部局長、教職員とともに、心からおよこび申し上げます。また、ご家族の皆様にも心からお慶び申し上げます。京都大学修士は累計52,637名になり、京都大学修士（専門職）は53名、京都大学法務博士（専門職）は134名ということになりました。

この中で、今回、法務博士（専門職）の学位は初めて授与されたものであります。昨年の中森喜彦法科大学院長の入学式式辞に述べられたように、今年度にはすべての学年がそろい、また初めての学位を授与することになって、皆さんは、現代の複雑、高度な法的問題に対処することができる、高い能力を持った法律家として学位記録の最初の1ページを飾ることになりました。

大学は知の殿堂であります。皆さんは、京都大学に蓄積された知を基にした学習に励み、研究活動に参加する機会を得たことによって、知を創造する世界に触れることができたと思います。修士論文を書いて審査を受けた方々も多いのですが、短い期間の経験からだけでは、まだ自分の論文の課題となった研究が完了したという実感がないかもしれません。これから進学し、あるいは社会に出て活躍し、さまざまの道を歩いて行くことになるでしょうが、さらに研究を続け、いずれはその課題を完成するよう研鑽を積んでいただきたいと思います。

京都大学は、世界の各地で国際シンポジウムを今までに7回開催しました。今年も2回開催する計画を持っています。そこでは特定の分野をテーマにして、開催地の専門家との連携のもとに、最新の研究成果を発表して議論を深めることを目的にします。京都大学の大学院生の方々にも、たくさん参加していただいて、現地の研究者たちとの交流のきっかけを掴んでいただくことができたと思います。私もそ



のようなシンポジウムに参加して、そこでその分野の大学院生の皆さんと出会い、その研究成果に触れる機会を得ることができます。いつの場合にも、大変活発な研究発表があり、学問の最先端で活躍する若い研究者の姿に接して感銘を受けました。今日のこの学位授与式にも国際シンポジウムで出会った方々がたくさんおられることと思います。

先週、3月16日(木)には、京都大学の附置研究所と研究センターが主催して、10時から17時まで長時間にわたるシンポジウムが東京の品川で開催されました。「京都からの提言 21世紀の日本を考える(第1回)、サブテーマ：危機をいかに乗り切るか？東アジアといかに向き合うか？」というシンポジウムで、700席ほどの品川インターシティーホールが文字通り超満員になるほどの盛況でした。私も一日それに参加して、京都大学の持つ知の蓄積がいかに奥の深いものであるかを、あらためて実感することができました。

今回、東京で第1回のシンポジウムを開催したのは、また新しい試みです。京都大学の附置研究所と研究センターの活動を、学外の人々に知ってもらうのが主な目的です。今後も全国の主要都市で同じように開催しようという企画です。このような催しにおいても、皆さんたちの成果が活かされていくこととなります。

私は、この学位授与にあたって、修士論文を提出された方々については、その論文の課題を拝見しました。そこから京都大学の幅広い教育と研究の分野が見て取れました。例えば、歴史研究でも地域研

究でも、その研究課題は多岐にわたるのですが、国と国、国家と人、社会と人、人との関係が調査され、論じられる場合が多く見られました。そのようなタイトルをいくつか紹介してみたいと思います。

人間・環境学研究科共生文明学専攻の張小蜜さんの論文は「魏晋における人物評価 劉邵の『人物志』の研究」です。漢帝国が滅亡した後、隋によって中国が統一されるまでの時代は魏晋南北朝時代と呼ばれ、多くの政権が存在したという特徴を持つ時代でした。複雑な政局が複雑な評価体系を生み出すことも、複雑な価値観を生み出すこともあり、このような時代の特長は、この多様性の時代と呼ばれる21世紀の世界を考えるとときにも、また東アジアの問題を考えるときにも、たいへん興味ある課題であると思います。

この時代の後、隋によって統一されたときには、中国を中心に見た東アジアの地域との関連が生まれ、隋の周辺には大きな拡がりが出ていたと考えられます。これが品川のシンポジウムで議論された、現代の東アジアの課題にもつながる長い歴史への幕開けであったのかもしれない。

人の生き方や人と自然の関わりをさまざまな眼でとらえた研究課題もあります。農学研究科森林科学専攻の安藤直彦さんの論文は「中山間地域の小規模林家の存立条件 - 岐阜・加子母の事件例から - 」です。

農学研究科森林科学専攻の佐々木千枝さんの論文は「沿道コミュニティから見た街路樹の意味 - 京都市商店街の事例研究」です。

また、農学研究科生物資源経済学専攻の竹下智子さんの論文は「開発紛争にみる法的当事者の二重性 - 川辺川ダム開発反対運動を材料に - 」というものでした。

情報学研究科知能情報学専攻の松本祥平さんの論文は「人間ロボット協調のためのRNNPBを用いた擬似シンボルの獲得」です。人のことを考えるのに、工学の立場からのアプローチも大切です。

私の専門分野でもある地球科学の見方で東アジアを見ると、そこは世界的にも珍しいほど活発な地形の変動が見られる地域です。造山運動を経験した地域や現在造山運動が進行中の地域は、造山帯と呼ばれますが、それは変動帯とも呼ばれ、数百キロにわたる幅を持ち、数千キロに及ぶ長さの地域が、細長い弧状列島を形成する場合が多く見られます。現在動いている地域では、日本列島やヒマラヤ山脈、ス

ンダ列島のように、高い山脈や、火山活動、大地震などが特徴的に見られます。これはプレートが集まってくる運動によって起こる現象です。東アジアをこのような目でとらえると、さまざまな特徴が浮かび上がってきますが、とりわけ自然現象によって引き起こされる災害が人々の暮らしに影響します。修士論文には自然現象や自然災害に関連する課題も多く見られました。

例えば、理学研究科地球惑星科学専攻の瀬川紘平さんの論文は「琉球弧から台湾にかけてのGPS速度場とテクトニクス」です。変動帯の動きを知るための基本になる研究です。

同じ専攻のHETTY TRIASTUTYさんの論文は「インドネシア西ジャワ・パパンダヤン火山のモノクロマティック地震と低周波地震の震源メカニズム」です。人間・環境学研究科環境学専攻の井上和久さんの論文は「阿蘇火山における大規模噴火をもたらしたマグマ溜まりの形成プロセス」です。火山活動も、変動帯の顕著な特徴の一つです。また、自然災害に関する課題では、人間・環境学研究科環境学専攻の陳家瑀さんの論文は「日本の災害対応初動体制の初歩的な探求 - 震災対策を中心に」です。人間・環境学研究科共生人間学専攻の柴田慎士さんの論文は「防災・災害救援活動における市民参加 - 災害NPOの役割とその変遷 - 」です。情報学研究科社会情報学専攻の城下英行さんの論文は「防災教育の推進に関する制度論的研究」です。

このように、今日の学位授与にあたって、皆さんの名簿を拝見していて、あるいは研究課題を拝見していて、京都大学の幅の広さをあらためて実感することができました。

今日までに身につけた知識と、研究を進める能力を発揮して、皆さんが進学し、あるいは社会に出て、世界で活躍する人材であることを願って、修士、修士(専門職)、法務博士(専門職)、それぞれの学位のお祝いいたします。

おめでとうございます。

博士学位授与式における 総長のことば

平成18年3月24日

総長 尾池 和夫

今日、新たに、566名の京都大学博士が誕生しました。学位を得られた方々、まことにおめでとうございます。ご列席の、副学長、各研究科長、学舎長、教職員とともに、課程博士487名、論文博士79名のみなさんに、また、参列されたご家族に、およろこび申し上げます。

皆さんの学位論文は、それぞれに関連分野に貢献し、世界の人類の知的財産として蓄積されることとなるでしょう。京都大学は、創立以来の歴史の中で、34,008名の博士を送り出してきました。この学位論文の蓄積がまた新たな研究を進める基礎になるのです。

地球上には、地表に沿って、あるいは水上に、さまざまな形で人が住んでいます。私が自分の目で見ることができた住まいの形の中だけでも、たくさんの住み方がありました。例えば、ペルーの高地にあるチチカカ湖の湖面には、トトラというカヤツリグサ科の植物を長く刈り取ったもので、立派な島を作って住んでいる人々がいます。トトラを積み上げて平らな場所を作り、そこにトトラで家を建て、トトラの束で作った舟に乗って、トトラで編んだ網を用いて魚をとって暮らします。沈まないようにいつも新しいトトラを島に敷きつめていきます。

西安の郊外で見た家は、黄土層の中に掘り込んだ広い穴にありました。道に沿った崖の分厚い地層に穴を掘って、道路に面した入り口のドアと塀だけの、冬は暖かく、夏は涼しい家をつくって暮らします。

このような場面を、専門の研究のためにフィールドを歩きながら、ふと気づいて写真に収録し、いつの日かそれが次の研究課題につながっていくこともあります。去る3月10日には、公開講演/シンポジウム、「映像が語るフロンティア精神 - 京都大学フィールドワークの80年 - 」が開催され、また、4月30日までの予定で、写真展「異境の瞬間 - 京都大学フィールドワークの80年 - 」が京都大学百周年時計台記念館1階で開催されています。

京都大学のフィールド科学の伝統は、さまざまな分野に浸透して、大きな成果を生みだしてきました。京都大学の海外拠点は今では34か所にのぼり、さ



まざまの形での学术交流の橋渡しをしています。

第7回の京都大学国際シンポジウムは「地球・地域・人間の共生 - 野外科学の地平から」というものでした。バンコクでのこのシンポジウムには、京都大学から大学院生をたくさん含む46名が参加して研究成果を発表しました。大学院生たちによるポスター発表では、アジアやアフリカなどの各地域を研究のフィールドとして活動している様子をつぶさに見ることができました。

京都大学の学位論文には、文字通り野外科学として、フィールドを歩いて貴重な研究を完成した論文が多く見られます。今回、学位を授与された論文の審査報告から、いくつかを引用させていただきます。

理学研究科地球惑星科学専攻の杉戸信彦さんの学位論文は、「逆断層の地震時地表変位の再現性：石動山断層・長野盆地西縁断層帯を例として」です。主査は、岡田篤正教授です。

日本列島には、約2000の活断層がありますが、その多くが逆断層です。この研究では、地震時における地表変位の特徴を調べ、地震時地表変位の再現性を、実際の事例をもって検証した成果として大きな意味をもっています。

同じく、地球惑星科学専攻の大坪 誠さんの学位論文は、「新潟褶曲帯における断層解析によって明らかになった応力状態の深さ依存性」です。主査は、山路 敦助教授です。

これは、新潟地域の褶曲した若い地層中に形成された多数の小断層を観察し、地震の発震機構データを用い、若い造山帯における応力状態について検討

したもので、その結果、応力場の複雑性に関して、大量の地表データおよびボーリングコアから得られた地下データを駆使しながら、造山帯における応力場の垂直変化を明らかにした研究であります。

私たち人間はサル目ヒト科に属していますが、京都大学の霊長類研究も着々と成果をあげています。理学研究科生物科学専攻の松阪崇久さんの学位論文は、「野生チンパンジーの遊びにおける社会交渉の研究」です。主査は、山極壽一教授です。

ヒトは頻繁に遊ぶ動物であり、ヒトの遊びは、詩・音楽・スポーツなど多岐にわたり、文化的多様性にも富むとされます。この研究は、この遊び行動の進化史的意義を明らかにするため、タンザニアのマハレ山塊国立公園で長年調査されてきたチンパンジーの集団に見られる遊びにおける社会交渉を観察したものです。これまであまり探求されてこなかった、社会的遊びのコミュニケーションについて、とくに音声の機能に注目して論じ、また、新しい遊びの文化の伝達について論じた論文であり、類人猿で非適応的と考えられる文化行動が伝播する意義を考察した点が、特筆に値すると評価されました。

地球環境学舎地球環境学専攻の笹木義雄さんの学位論文は、「瀬戸内海における半自然海岸および人工海岸に成立した海浜植生の自然性を評価する手法の開発」です。主査は、森本幸裕教授です。

本論文は、自然海岸の消失の著しい瀬戸内海沿岸地域を対象に、失われた自然海浜植生を復元するための方法論について、復元生態学の視点から考察を加えた論考であります。丹念な資料収集と詳細な現地調査結果から、客観的な植生評価手法を開発することで、自然再生のための植生管理の方法論にアプローチしたもので、景観生態学、復元生態学の発展のみならず、海浜の保全・再生事業にも寄与するところが少なくないと審査報告に述べられています。

フィールドワークで培われた手法は、現在の現場だけでなく、歴史の研究においても活かされます。また、歴史の研究が現代の社会の研究へ活かされることもあります。

人間・環境学研究科文化・地域環境学専攻の蘇明明さんの学位論文は、「唐代の文人と喫茶 - 唐詩を中心に考察する」です。主査は、松浦 茂教授です。

本論文は、中国において古くから極めて精神性の高い文化として意識されてきた喫茶文化について、その大きな担い手であった文人層に焦点をあてつ

つ、彼らが残した文学作品を主な資料にしながら、喫茶という行為がいつ頃からどのように文学作品の対象となってきたか、そして彼らの精神生活とどのように関わってきたかを考察したものである、と報告されました。

経済学研究科現代経済学専攻の山根眞一さんの学位論文は、「韓国財閥とコーポレート・ガバナンス～LGの歴史と経営発展～」です。主査は下谷政弘教授です。この論文は7つの章から構成され、LGグループの経営発展を歴史的に概観し、日本企業とは異なる韓国財閥を研究したもので、現代グループや三星グループなどに比べて残されていたLGグループの実体が明らかにされた興味深い論文であります。

また、論文博士（文学）の青山宏夫さんの学位論文は、「前近代地図の空間構成と地理的知識」です。主査は、金田章裕教授です。

この論文は、近代地図成立以前に日本で作製された地図を中心に、その表現法とそれによって再構成された地図空間の特質、および地理的知識や景観について考察したものです。前近代地図が空間変換と記号化に関して、近代地図と大きく性格を異にしている点に注目して研究が行われました。

論文博士（工学）の宮井 宏さんの学位論文は、「古記録を用いた京都の冬季気温と降水量の推定に関する研究」です。主査は、池淵周一教授です。

本論文は、京都で記された日記体の古記録と諏訪大社の御神渡の記録を収集・編纂し、11世紀以後の京都の冬季気温と降水量を推定するとともに、ヨーロッパにおける観測値などとの比較、検証をはかった結果をまとめたものです。例えば、小氷期の気温低下を除き、京都とブリテンの気温変動が同調していること、また両地点の降水量がともにこの1,000年間、漸増傾向にあることなどを明らかにしており、たいへん興味深い研究成果をまとめておられます。

IODP（統合国際深海掘削計画）と呼ばれる国際プロジェクトが始められました。日本やアメリカ合衆国、ヨーロッパの15か国が参加して、海底から地下構造を調査するものです。日本の海洋探査船「ちきゅう」も、このプロジェクトに参加し、水深4000メートルの海底から、深さ7000メートルのマントルに達する掘削を行います。例えば、地下深部の岩の中にどんな微生物がいるかという課題もあり、それらが生命の起源となった可能性をもつのか

どうかというような研究課題があります。このような壮大な計画も、やはりフィールドワークの精神で行われると私は思っています。

2006年4月から始まる第3期科学技術基本計画では、5年間で25兆円を投資するという政府の方針があります。2006年度の計画では、宇宙航空研究開発機構のロケット打上げ計画が目立っています。世界的な高性能を誇るスーパーコンピュータの開発に注目する人もいます。このような大規模な研究にも、京都大学からたくさんの研究者に参加してほしいと思います。またその一方で、今日いくつか紹介したような、フィールドワークの精神を活かした基礎研究も、今後とも京都大学の伝統として育てていくことが大切です。

本日、博士の学位を得られた皆さんは、これからさらに学問の世界に深く入っていくという方、社会人として新たな場所で活躍を始めようという方、さまざまの道があると思います。学位論文をまとめる過程で得た知識と知の創造の経験を生かして、知の蓄積を広く世界へ伝える役割も果たしていただきたいと思います。同時に、京都大学の学生たちを先輩として直接に、あるいは間接的にご指導いただくようお願いします。

人類の福祉に貢献するという基本を忘れず、さらなる研鑽を積んでいただくことを願って、私のお祝いの言葉といたします。

おめでとうございます。

大学の動き

平成17年度卒業式

3月24日(金)午前10時から、総合体育館において沢田敏男元総長、長尾 真前総長、名誉教授をはじめ各副学長、各部局長等の出席のもとに平成17年度卒業式が挙行された。式は京都大学交響乐团による式典曲「輝を垂れて千春を映さんとす」の奏楽で始まり、学歌斉唱の後、尾池和夫総長より各学部代表に学位記が授与された。

続いて総長の式辞があり、最後に全員で「蛍の光」を合唱して、午前10時50分に終了した。

新学士は、総合人間学部131人、文学部211人、教育学部68人、法学部349人、経済学部262人、理学部287人、医学部107人、薬学部85人、工学部930人、農学部302人の計2,732人であった。



平成17年度修士学位・修士(専門職)学位・法務博士(専門職)学位授与式

3月23日(木)午前10時から、総合体育館において沢田敏男元総長、名誉教授をはじめ各副学長、各部局長等の出席のもとに平成17年度修士学位・修士(専門職)学位・法務博士(専門職)学位授与式が挙行された。尾池和夫総長より各研究科、学舎代

表に学位記が授与された後、総長の式辞があり、午前10時40分に終了した。

修士課程修了者は、文学87人、教育学41人、法学41人、経済学86人、理学286人、医科学18人、社会健康医学1人、薬学87人、工学616人、農学

296人，人間・環境学154人，エネルギー科学132人，地域研究9人，情報学177人，生命科学75人，地球環境学33人の計2,139人で，専門職学位課程修了者は，社会健康医学33人，法務博士134人であった。



博士学位授与式

3月23日(木)午後1時から，総合体育館において，尾池和夫総長，教学担当理事をはじめ，各研究科長・学舎長出席のもとに，博士学位授与式が挙行された。

総長から，各授与者に対し学位記（平成18年3月23日付）が手渡された後，総長の式辞があり，午後2時40分終了した。

各分野別内訳は次のとおりである。



学 位	課程博士	論文博士	計
博士（文学）	20	12	32
博士（教育学）	4	1	5
博士（法学）	3	—	3
博士（経済学）	30	5	35
博士（理学）	113	7	120
博士（医学）	72	4	76
博士（社会健康医学）	1	—	1
博士（薬学）	16	—	16
博士（工学）	91	22	113
博士（農学）	36	17	53
博士（人間・環境学）	28	3	31
博士（エネルギー科学）	8	3	11
博士（地域研究）	8	2	10
博士（情報学）	29	3	32
博士（生命科学）	22	—	22
博士（地球環境学）	6	—	6
計	487	79	566

医療技術短期大学の動き

平成17年度医療技術短期大学卒業式・修了式

医療技術短期大学部では、3月17日(金)午前10時から、講堂において、来賓の出席のもとに卒業式・修了式が挙行された。

式は、卒業証書・学位記及び修了証書授与に引き続き、学長式辞、来賓祝辞があり、午前10時45分に終了した。

卒業生は、看護学科85人、衛生技術学科35人、理学療法学科18人、作業療法学科22人で、修了生は、専攻科助産学特別専攻20人の計180人であった。

本短期大学部は、平成15年10月、4年制の医学

部保健学科に移行し、平成16年度からは学生の募集を停止した。昭和50年4月の開校以来、卒業生3,994人、修了生598人を輩出してきたが、専攻科の学生が修了する平成19年3月をもって閉校となる予定であり、学科の卒業式としては今年度が最後となる。

現在、医学部保健学科には、1回生155名、2回生158名、3回生131名が学んでおり、平成20年3月に最初の卒業生を送り出す。

